



社会化される生態資源  
- エチオピア 絶え間なき再生

福井勝義 編

本書は、エチオピアをフィールドとして第一線で活躍中の文化人類学者たちによる論文集である。扱われている地域は南部が中心である。本書の大きな特徴は、歴史的な変容を視野に入れた分析である。それが、地域も関心もさまざまであるこの本に、単なる論文集ではない統一感をもたらしている。本は四部構成であり、それに加えて1章に等しい長さの序章(宮脇幸生・石原美奈子)がある。序章での「中央」と西南部地域との歴史的な関係についての概観は、あまり日本語では紹介されていなかったことを考えると貴重である。

各論文を紹介すると、第一部「生存の多様化選択」で、第1章(宮脇)と第2章(松田凡)は、近接した地域にありながら、正反対の生存戦略をとる二つの民族を、国家との関係に着目して分析している。第3章(藤本武)は、調査地におけるコムギの品種を分類し利用方法を調べることで、その動態的变化を検討している。

第二部「野生動物と人間の共存戦略」では、南部の野生動物の減少(第4章:増田研)とジャコウネコの「虐待」問題(第5章:石原)をとりあげ、これらの問題が「先進国」の論理によって語られており、現地民からの視角が欠落していることを指摘する。

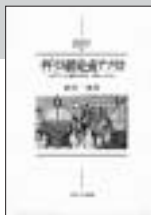
第三部「変化する森と人々の持続戦略」の第6章(松村圭一郎)はコーヒー栽培地域での森面積の増加に着目し、森が地元民の社会空間として存在することが森の維持につながるとする。第7章(佐藤廉也)では、森に棲む人々(マジャン)の歴史的变化に対応した生存戦略の形成過程が取りあげられている。

第四部「社会変動と空間の再編成」では、第8章(田川玄)が国家との関係による年齢体系(ガダ体系)の変容を分析し、第9章(福井勝義)は、筆者が30年にわたって調査してきたボディの戦いの歴史から、その攻撃性を成立させている文化へと思いをめぐらす。

国家との関係の歴史の変容が、人々そして文化に何をもたらすのかを深く考えさせられる。力作である。

(児玉由佳)

京都 京都大学学術出版会 2005年 380p.



イギリス帝国と南アフリカ  
- 南アフリカ連邦の形成  
1899 ~ 1912

前川一郎 著

アパルトヘイトの起源をめぐることは、アフリカーナーの偏狭な人種観に原因を求めるリベラル派と、イギリス系資本の利害から説明を起こすラディカル派(ネオ・マルクス派)の間で大きな論争があったことがよく知られている。本書は、南アフリカ史研究で中心的ともいえるこのテーマに、イギリス帝国史研究の立場からアプローチした力作である。

本書の批判の矛先は、筆者が「和解の代償」論と呼ぶ、リベラル派の通説に主に向けられている。「和解の代償」論において、20世紀初頭の少数白人支配体制の確立は、南アフリカ戦争に勝利したイギリスが、アフリカーナーとの和解を急ぐあまり、アフリカーナ保護という「帝国の伝統」を放棄した結果として理解されてきた。それに対して本書は、南アフリカ戦争後もイギリスはアフリカーナ保護の大義を放棄せず、むしろその大義名分の下で人種隔離体制が構築されていったことを史料によって明らかにしている。本書の主張は、アパルトヘイトをイギリス植民地支配の「間接統治」の延長線上に位置づけたマムダニの議論を下敷きとしており、間接統治原理に基づく「原住民政策」の形成は、労働力の問題からは説明しきれないとして、ラディカル派にも疑問を投げかける内容となっている。

イギリスの帝国支配の論理から入り、本国とは異なる利害をもつ植民地のイギリス系住民、「アングロ対ブール」という単純な図式に収まらない複雑に入り組んだ関係をイギリス系住民と結んだアフリカーナー、そして白人が一つの「国民」となっていく過程で隔離され政治的権利を奪われた「原住民」へと、章を追うごとに、「支配する側」から「支配される側」へと徐々に視点が移されていく。「支配する側」を出発点としても、筆者の関心が常に「支配される側」に向かっていることを反映した構成である。もっとも、本書の全体としての強みは、筆者の専門領域であるイギリス帝国、すなわち「支配する側」の大きなパースペクティブのなかでの南アフリカの位置づけにあるように思われる。

(牧野久美子)

京都 ミネルヴァ書房 2006年 ix+292+14p.



ダトーガ民族誌  
- 東アフリカ牧畜社会の地域人類学的研究  
富川盛道 著

「甦るアフリカ研究のバイオニアワーク」と帯にあるとおり、著者の富川氏(故人)は、今西錦司らが中心となって1960年代に実施された、京都大学アフリカ類人猿学術調査隊の中心メンバーであった。この調査隊のなかで富川氏は人類班の責任者をつとめ、東アフリカの牧畜民ダトーガの調査を行った。本書は富川氏が生前に執筆したダトーガ研究の成果を一冊にまとめ、あらためて世に問うたものである。

全9章からなる本書の内容は、ダトーガ社会のさまざまな側面を民族誌的に記述・考察したものである。各章が扱う内容は幅広く、ダトーガの地域集団としての特性、分布と移動、人間関係、民族医学、生と死、女性などのトピックが取り上げられている。

各章が最初に発表された媒体は、学術雑誌から一般向けの書籍までさまざまである。そのため各章の難易度や記述の綿密さ、および文章スタイルなどがかなり異なっており、一冊の本としては全体が不統一だという印象は残る。しかしその一方で、富川氏のさまざまな文章スタイルを「楽しめる」ことも事実である。評者が特に印象に残ったのは、ダトーガのある少女の成長、結婚、離婚、そして彼女がダトーガ文化と決別するまでの過程をつづった「1まいのスカート」(第9章)である。一人の女性に起こった出来事を淡々と記述しつつ、ダトーガ文化に対する深い理解を随所ににじませるこのエッセイは、不思議な読後感を残す文学作品のような逸品であった。

本書巻末には、富川氏とフィールドワークをともに行った富田浩造氏によるエッセイと、日野舜也氏による富川氏の仕事についての解説も掲載されている。この二つの補章があることで、富川氏の人となりやその業績の位置づけなどが、読者にわかりやすく伝わるようになってきている。医学博士でもある富川氏が、フィールドワークをしながら毎日多くの患者の診療をし、患者から謝礼として贈られた牛が50頭、鶏が200羽あまりに達していた話など、氏の人柄が想像できて興味深い。(高根 務)

東京 弘文堂 2005年 429p.



旅の指さし会話帳60 ケニア  
宮城裕見子 著

スワヒリ語会話の入門本にしかみえないタイトル、それほど変哲のない背表紙。スワヒリ語が必要ない人、逆に何度もケニアを訪れているような人は、おそらく本書の前を素通りしてしまうのではないだろうか。そこをなんとか、ぜひ少し立ち止まって手にとってみていただきたい。

言葉の本として編まれた(文字やイラストを指さすだけで相手と意思疎通できるように作られている)とはいえ、本書のもう一つの真価は、その優れたケニア紹介にある。食事の会話用に紹介されるのは、おなじみのシチュー、スクマウィキなどまさに普段の夕食、町中の居室として描かれるのは、刺繍入りのカバーの掛かったソファとテーブル、壁には宗教画、大きな木製テレビ台におさまった黒いテレビ、「若者文化」の会話では「カワイイね manyanga!」「よく考えて chilli!」といった調子。旅行者がそこまでケニアの人々の日常に触れる機会をもつかどうかは別として、全編にわたって「普通の」(著者の暮らすナイロビとその近郊農村に偏りがちであることは否めないのだが)暮らしを等身大に紹介して実に見事である。このほか、スワヒリ語とケニアの障害者事情が深く関わるとする思いがけない問題提起も登場する。

もちろん、アフリカ紹介本にありがちな「雑さ」を、残念ながら本書もたしかにもっている。「東洋人である日本人は...『今』を疲れている人も多い」一方で「アフリカ人」は「ノープロブレムの精神」をもっていて「将来を憂いすぎない楽天性がみずからを救っているのではないか」と著者が思いをめぐらすくだりなど、本誌読者を嘆息させる部分かもしれない。

しかし、そうした小さな退屈を補ってあまりある魅力が本書には詰まっている。こんな形で日本の人にケニアを紹介することができたのかと、評者は思わず居住まいを正した。すみずみまで目を配り、丁寧に作った著者の気概に触れるだけでも心の晴れる、おすすめの一冊である。(津田みわ)

東京 情報センター出版局(株) 2005年 128p.





アフリカとアジア  
- 開発と貧困削減の展望

高梨和紘 編

日本のアフリカ経済研究の第1世代であった故矢内原勝・慶應義塾大学名誉教授を追悼して編まれた論文集である。矢内原教授に指導を受け、あるいは日本アフリカ学会はじめ同教授の所属学会で交流をもった研究者らが、それぞれ現在の研究関心に沿って執筆している。全体は「苦闘するアフリカ」、「グローバル化するアジア」、「開発協力の現在」と題された3部、計14章で構成されている。

第1部「苦闘するアフリカ」には5章が配置され、マクロからミクロにいたるトピックが展開されている。まず第1章「アフリカにおけるIMF・世銀の政策の実績」(坂元浩一)では、筆者年来のテーマである構造調整政策の背景とその実施がレビューされ、その効果について評価がなされている。第2章「アフリカ都市に対する食料供給問題 ウガンダにおける実態調査より」(吉田昌夫)もまた筆者が長年取り組んできたテーマであり、経済自由化の下での近年の展開を実証的に分析している。第3章「『過剰な死』が農村社会に与える影響」(島田周平)は、筆者の調査地(ザンビア)でのHIV/エイズ拡大がもたらした多くの人びとの死がもたらす経済的、社会的影響の深刻さを描き出している。第4章「開発政策と農民 セネガルの落花生部門 1960 - 2000年」(勝俣誠)も筆者の調査地(セネガル)における主要輸出部門である落花生生産の経緯をたどり、国家介入の役割とその変遷を分析している。第5章「アフリカのマイクロファイナンスと貧困削減」(高梨和紘)は貧困層を対象とした貸付アプローチとしてのマイクロファイナンスに注目して、そのアフリカでの展開を具体的事例に即して検討している。

対象地域ばかりでなく、問題領域の上でも本書は広範な拡がりを読者に提示しているが、それはまた故人の研究関心の広さを示唆するものと言えるのかも知れない。

(望月克哉)

東京 慶應義塾大学出版会 2006年 xxxv+476p.



アフリカ政策市民白書2005  
- 貧困と不平等を超えて

大林稔・石田洋子 編著

すべての援助関係者に必読の書といっても異論はないだろう。アフリカに関係する学界、非政府組織を中心に、東京アフリカ開発会議に市民社会の意見を反映させようとした市民活動がACT2003であったが、本書はその活動を継いだTICAD市民社会フォーラムによる日本のアフリカ政策に関する市民白書である。

本書で注目すべきはケニア、セネガルの現地NGOに日本の援助を評価してもらった点にある。そこで指摘されているように、日本はインフラ整備にしても、技術協力にしても日本の技術移転に固執してきた。裏返せば、どのような技術を移転すれば、未永く持続的に汎用モデルとして現地で普及するかといった議論を避けてきたのだ。最善の方法を相手国との議論のなかから見出す努力から逃げてきたことをアフリカの視線は見逃していない。この事実を突きつけていることに本書の意味はある。

ただ、対アフリカ援助額の減少に言及しながらアフリカ側が借款を返済することで支援額が相殺される点に触れていないのが気になる。また、アフガニスタンの民主化支援など世界的な緊急課題への対処で援助資金の配分が変わらざるを得ない時に、アフリカ支援の増額をどう要求し続けるのかといった疑問も残った。さらには本書が主張する日本とアフリカ、双方の市民社会の果たす役割を拡大すべきという点については、欧米とアフリカ双方の市民社会の援助への関わり方を例示するにとどまらず、なぜ日本ではそのような関係に至らないのかということまで切り込んでほしかった。それは、欧米のアフリカ援助では援助側も被援助側も政府組織の限界を率直に認めていて、非政府組織の役割を必要とする姿勢が日本と明らかに異なるからだろう。

援助をとおしてアフリカの信任をとりつけるには、先ず本書のような日本の市民社会の意見に向かい合うべきではないか。対アフリカODAに関わるすべてのレベルの関係者に真摯に受けとめてもらいたい意見書である。

(吉田栄一)

京都 晃洋書房 2006年 107p.



## アフリカ国家を再考する

川端正久・落合雄彦 編

社会科学の立場からアフリカを研究する者にとって、国家の問題は避けて通れない。世界的関心を集めているアフリカの貧困や紛争にしても、その要因を考えていくと、国家が抱える困難性に突き当たる。こうした問題状況を反映して、特に1990年代以降、アフリカ国家をめぐる研究が世界的に蓄積されてきた。

本書は、アフリカ国家を正面に据えた研究論集であり、国内外から15名が論考を寄せている。ここまで本格的なアフリカ国家論集は日本初といってよい。冒頭に置かれた、編者の一人川端による約80ページの長大な論文は、アフリカ国家論の系譜と近年の展開を丁寧にレビューしている。また、加茂省三や岩田拓夫の論考により、近年のアフリカ国家論に重要な貢献をしたフランス政治学の流れもフォローできる。その他、高橋基樹や遠藤貢は国際社会との関係を論じ、峯陽一、望月克哉、斎藤文彦らは統治システムや中央・地方関係について考察し、戸田真紀子は武力紛争との関連性を明示し、牧野久美子や藤本義彦らは政策決定過程や市民社会の役割を検討するなど、多くの論者がさまざまな角度からアフリカ国家に分析を加えている。アフリカ国家をめぐる問題を真剣に考えようとする者にとって、本書は必読文献といえるだろう。

本書の重要性を強調した上であえて注文をつけるなら、アフリカ国家を取り上げる際の編者側の問題意識と先行研究に対する評価をもう少し明示的に打ち出してもよかったのではないかと。冒頭の川端論文はきわめて網羅的に先行研究をレビューした力作だが、それらの評価については抑制的な姿勢が貫かれ、膨大な先行研究の整理と紹介に徹した感がある。これは、研究蓄積を可能な限りたくさん(かつ中立的に)紹介しようという筆者の意思とストイシズムの現れなのかも知れない。ただ、アフリカ国家論の多様性が論者の問題意識と研究視角の多様性を反映したものであることを考えれば、編者の問題意識に照らした先行研究の評価を行うことで、本書のスタンスや各所収論文の位置づけがよりはっきりしたのではないかと思う。(武内進一)

京都 晃洋書房 2006年 xi + 389p.

帝国への抵抗  
- 抑圧の導線を切断する

戸田真紀子 編

本書は、「帝国主義の犠牲者」としてアフリカと太平洋諸島を取り上げている。アフリカと並んで太平洋諸島が取り上げられていることに違和感をもつ人もいるだろう。それに関して本文では、太平洋諸島は意外にもアフリカとの共通点を多くもっており、「太平洋諸島のアフリカ化」と称されているほどであると指摘している。

本書は5章で構成されている。第1章では、「帝国」の定義を行った上で、解放闘争・貧困・国内紛争というトピックから、帝国に抑圧されるアフリカが描かれている。続く第2章、第3章ではいずれもケニアが取り上げられている。第2章では、「マウマウ」を違法とする法律が2003年に廃止されるまで続いていた「マウマウ」の封印について書かれている。続く第3章では、植民地時代の「独立学校」成立に伴う闘争が取り上げられている。第4章では、ジンバブエの解放闘争における政治と軍事、農民社会との関係が描かれている。

第5章では、対象地域が一変し、太平洋諸島が取り上げられている。太平洋諸島は、紛争・貧困・環境・累積債務などの面でアフリカと同様な状況を呈してきたという理由から、「アフリカ化」していると分析されている。本章では、こうした状況下において、太平洋諸島が他の島嶼とネットワークを形成し、帝国の支配に対抗していった歴史が書かれている。また本章では、「日本という帝国に抗している沖縄」にも言及されており、日本も「帝国」とは無縁ではないことを再認識させられる。

本書のまえがきに「執筆者は皆、『帝国』に抑圧される草の根の人々を解放するために何かをしたいという気持ちを持っている」(p.iii)という言葉があり、5人の執筆者の気持ちがぎっしりと詰まった力作である。巻末には解放闘争関連年表ならびに用語集、参考書リストも掲載されており、多様な読者層が満足できる一冊であろう。(原島 梓)

京都 世界思想社 2006年 ix + 208p.

